

昭和 55 年 6 月 20 日発行
「宮川名誉会長 - 海の星特集号」
海星同窓会発行より抜粋

宮川名誉会長

海の星 特集号



1980

海星同窓会

十二、プロローグ

—— 幾山河を越えて ——

宮川会長の父君が、海運業によって財をなしておられたということは、宮川会長の生涯に大きく影響したようである。

会長の少年時代をかたちづくったその郷土、原城趾に続く大江の浜の茫々たる眺望も、海洋への憧憬をかき立てたにちがいないのであるが、それよりも、やはり親ゆずりの血の力の方が強かつたろう——。

会長が郷里をとり出して長崎へ来て、まず海星への入学を志したのには、たしかに「海外」への志向が力強く働いていたろうし、更に勉学の東京から帰って来て、長崎にその永住の家としての歯科医院を築くのに、大波止を選んだというのも、そのためだったし、やがて、隣り合って宮川海運KKの設立へと発展していったのもそのためであった。

宮川海運KKは、大波止ターミナルビル四階にある。その会長室の広いガラス窓からは、長崎の港がよく見渡せる。会長のイスは、その港の金波銀波が見える位置にすえてあるのである。

しかし、会長が「本分」としていたのは、やはり歯科医であって、けっして海運業ではなかったようである。その手記の中にも母堂の庭訓として、

「船に手を出すな、議員さんになるな、妾をもつな、の三鉄則が

持ち船「諏訪丸」甲板上の会長



母の与えた教訓でもあった」

と記しておられる。だから、母堂健在中はこの三則を守り通したらしく、「船」に手を出しはじめたのは、どうやら母堂が死去された昭和十四年以降のことであるらしい。

そして現在の成功をおさめたのである。父の家業を引き継いだのではなかったが、結果としては、父が仕残した事業を見事に結実させたといえるのだ。宮川海運KK会長としての得意や察するに余りがある。

「人間万事塞翁が馬」という句を前にも書いたが、この宮川海運KKも、決して平坦な明るい道をのみたどったのではなかったそうである。なげきや、かなしみや、よるこびやの幾山河を踏み越え、怒涛をのり切って来たからこそ、現在の繁栄がひとしお楽しいのである。

ここに第八宮丸の写真をかかげたが、その雄姿が宮川会長の現在の一面を如実に物語っているとは言えないだろうか。

会長は今年八十二歳になられた。しかもなおカクシヤクとして毎日、会長室に出勤しておられる姿は、どう見ても十歳は若く思われる。けれども、極力健康には気をくばり、けっして無理をしない日常生活である。

会長より七歳年上の姉君も、まだ元気でいらっしやる



車でお出かけです。右に見えるドアに入って、左手のエレベーターで四階へ。そこに宮川海運KKがある。
(大波止の港ターミナル)



〈得意の一打。空は日本晴〉

会長は60歳でゴルフを始められたのであるが、それには見事なフォーム。

○元長崎県・市歯科医師会会長

○元日本大学歯科同窓会会長崎支部長

○元本蓮寺護寺会会長

そのほかにもライオンズ国際協会元ガバナ―で名誉顧問であったり、慈光園の理事として、社会福祉事業に手をかしたり、あれやこれやと多忙な日常である。

かなり年をとってから始められたゴルフも、老後のよき伴侶であった。

「健康のゆるすかぎり、クラブを振り回しますよ」といつておられる。

昭和四十五年九月三日記と奥書きのある「有馬高等小
学校、六十一年前の回顧」と題する冊子の最後に、

昔から「無財の七施」

と題して、

慈眼・和顔・愛語・献身・謙遜・同情・調和、

右の施しには一文の財も不用、

各身の心である。



〈宮川海運株式会社〉

奥まった正面が宮川会長と石原社長。

し、それこれ考え合わせると、会長はまだまだ社会のため人のためにも長寿を保っていただきたいものだと思っている。

会長はその手記の中に、

「終戦後、長崎県歯科医師会長三期、国際ライオンズ長崎クラブ会長、W3地区PR委員、ZC、DG、W3地区ガバナー、日本大学同窓会長長崎県支部長などを勤め、そのほか、先輩朝長雄三氏とともに、原爆被災後の菩提寺本蓮寺の復興再建、今の姿を見ることは、歯科医師会館と共に心の遺産として無上の喜びを感じている」と記されているが、それは功なり名を遂げた達人ともいえそうな、安らかな心境なのであろう。

「会長さん」と呼びなれてしまっていた。それで通用するほど、ずいぶんいろんな会の会長をつとめられたのであった。

○宮川海運KK会長

○宮川ビル（大波止）代表者

○海星同窓会名誉会長



〈繁栄の宮川会長ご一家〉

というようなことが書いてあったように思う。これが、会長の現在到達しておられるすばらしい境地に違いない。

この稿を終るにあたって、ぜひ書きとどめておかねばならぬことがある。それは宮川名誉会長の人となりを、最も適切に物語っている事実なのである。

昭和五十三年三月に、宮川会長は金五万円をもって、海星の校長室を訪れ、それを中山校長に手渡ししながら、「これで、確か、ちょうど百万円になるようですよ」とおっしゃった。

とにかく十年ほどの長きにわたって、ほとんど毎月、自ら金老万円也を持参して、海星育英会資金に当てて下さいと学校に差し出し続けておられたのであった。

普通の者には出来ないことである。金額を言っているのではない。毎月、欠かすことなく自らが持参されたこと、しかも、それが百月ほども続いたということ……これが至誠でなくて何であろうか。

母校を憶う至誠、後輩たちの育英に何かをプラスしたいという至誠――。

この一事は、宮川会長の金字塔であった。